



山本理顕 | GAZEBO [1986年]

Riken Yamamoto | GAZEBO

中村好文—イラスト
Yoshifumi Nakamura



「GAZEBO」は見晴し台という意味。その見晴し台に立つ山本さんと私のツーショットをカメラマンが近くの歩道橋の上から撮ってくれた。山本さんは子供のころからずっとここに住んでいて、このあたりが様変わりしていく様子をつぶさに見てきたという

書店の店先で自分の設計した住宅が初めて掲載された建築雑誌を手にとったときのことを、今でもはっきり憶えています。雑誌を開き、見慣れた自作の建物の写真が目飛び込んできたとき「ああ、やっと、ここまで来た」という想い…というより「感慨」がヒタヒタと胸に迫ってきました。今から24年前、1986年9月のことです。建築雑誌に載ったことぐらいで大きさな、と言われるかも知れませ

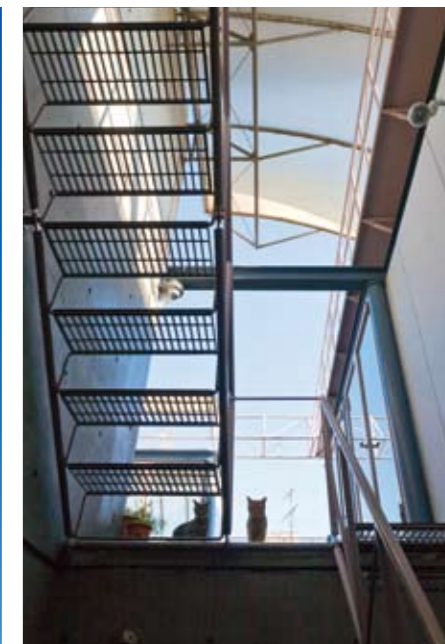
んが、市井に埋もれた無名の建築家には発表に至るまでに「語るも涙」の紆余曲折がありました。その話はひとまず置いて、感慨といえ、同じ雑誌に掲載された作品をひとつひとつ眺めていた私はべつな感慨にもひたりました。それは「ああ、自分は日本の建築の潮流から遠く離れたところにいるんだなあ」という感慨でした。私の雑誌デビューとなったこの号には「住宅デザインのニューウェーブ」というタイトルがつけられていて、伊東豊雄さん、長谷川逸子さん、石田敏明さん、北河原温さんほか、新進気鋭、才気煥発の建築家たちがきら星のごとく登場し、コンクリート、鉄骨、ガラス、パンチングメタル、金網などを奔放に駆使した先鋭的、実験的な住宅作品が競い合うように並んでいました。そんな中に、なぜか私の設計した木造校舎のような住宅が、いかにも場違いな感じで混じていたのです。前置きが長くなりましたが、じつは、この「住宅デザインのニューウェーブ」の巻頭を飾っていたのが、今回取りあげる山本理顕さんの自邸「GAZEBO」でした。外壁を覆う銀色のステンレスメッシュ、そのメッシュから屹立する打放しコンクリートの量塊、鋼管で縁取りされた透明ガラスの輝き、とり

わけH鋼の柱で天空高く支え上げた軽やかなヴォールト状のテントの写真には、思わず目を眩らすにはいられませんでした。よく見れば、H鋼の足元を支えるブラケットなどの凝ったディテールにも設計者の並々なぬセンスとデザイン力が見て取れました。この建物は店舗と貸室と住居からなる雑居ビルですが、そういう建物の用途をまったく想像させない(というより感じさせない)建物です。私には建物というより、金属とコンクリートとガラスをアッサンブラージュした巨大な彫刻作品に見えました。この建物の住宅部分が山本さんの自邸であることも、また、そこにどんな家族が住んでいるのかも解説では意図的に伏せられているようでした。つまり、そうしたことは写真と図面から

想像するしかなかったわけですが、図面を見れば見るほどこの住宅の謎は深まるばかりでした。私の中でその謎が少しずつ解けてきたのは、『住居論』という山本さんの著書を読んでからです。この本の中で山本さんは家族と住宅の関係について、これまでなんとなく信じられてきたことに対してピシリと異議を唱えます。「居間には一家団欒があり、寝室は夫婦の愛情を育み、子供部屋にはよい子がいる…」というのは単なる理想像なのであって、そんなものは現実的にはとっくにないのに、相も変わらずその理想像向けの住宅が作り続けられているのは変だぞ!、と山本さんは力説します。こうした考察から「一家族=一住宅」すな



道路に向かって背筋を伸ばしスックと立ち上がった印象のファサード。ステンレスメッシュは正面からわずかに角度がずれると半透明のスクリーンになる



3階から4階に昇る外部階段。上部にテントが架かっているので雨に濡れずに上られる。正面で2匹の猫が三つ指を突いて「GAZEBOへようこそ!」とお出迎え



その階段を中庭から見ると。右の階段を昇り、さらに正面に見える階段を昇ると見晴し台=GAZEBOに上れる



【建築概要】名称:GAZEBO | 所在地:神奈川県横浜市 | 家族構成:夫婦+子供2人 | 敷地面積:229.03㎡ | 建築面積:210.58㎡ | 延床面積:664.60㎡ | 規模:地上4階 | 構造:RC造+S造 | 設計:山本理顕設計工場

わち「核家族のための住宅=モダンリビング」というシステムがこれからは立ちゆかなくなることを予想し、それに替わる住居のシステムを考えようと思案は次第に深まっていくのです。山本さんは私たちの身体にも脳にも染みついて「一家族=一住宅」という既成概念を打ち砕くために様々な方法を考えます。たとえば学生たちには「《愛人と同居する家》を設計しなさい」というような挑発的な課題を出したりして、家族とはなにか？ 住宅とはなにか？ を、もう一度根底から問い直そうと試みます。

特筆しておきたいのは、こうした考えが単に観念的な論理の構築だけから生まれてきたわけではなく、山本さん自身の生い立ちから生まれてきていることです。「住居論」のあとがきを読んだとき、私の謎はすっかり氷解し、山本さんの住宅がずいぶん身近に感じられるようになりました。あとがきにはこう書かれていました。

—
なぜ住宅にこだわったのかはよくわからないけれども、発端は自分の家だったようにも思う。モダンリビングには程遠いのでためな家に住んでいた。家族構成もユニークだった。父親がいらない代わりに、祖母と叔母が同居して、さらにその叔母は軽い障害があったりしたのだから、普通の家族の生活に比べればかなりユニークだったと言っていると思う。

—
そして、こうした主張は住宅の実例として私たちの前に差し出されました。作品そのものが「核家族のための住宅=モダンリビング」を批評する役割を見事に果たしていたのです。「GAZEBO」はその代表的な作品でした。

—
「GAZEBO」を訪れた日は、雲ひとつない青空の下に暖かい陽光のあふれる小春日和でした。東横線の反町駅から建物を目指して歩いて行くと、紺碧の青空をバックにお目当てのヴォールト屋根がフワリと浮かび上がっているのが遠望できました。さらに歩いて行くと、建物の40メートルほど手前に横断歩道橋があり、心誘われるままに昇ってみると、その歩道橋は「GAZEBO」を見学するためのとつ

ておきの見晴し台でした。約束の時間より少し早めに着いた私は「屋根を建物から切り離して空中に浮かんでいるように付けると、それだけで、下にある空間との関係が見えてくるようだ」という山本さんの言葉を思い出したりしながら、歩道橋の上でしばらく建物を眺めて過ごしました。

そして、いよいよ内部です。山本さんの住居は3階と4階に玄関がありますが、どうやら3階のドアは来客用、4階は家族用というように入口は使い分けられているようです。「3階のチャイムを押してください」という山本さんの指示どおり、私は3階のドアから入りました。ドアを開けると、そこは屋内ではなく外部空間で、右手に階段の昇り口が待ち受けています。ここはどことなく裏階段的なイメージがありますが、階段は、ドーナツを半分に切ったような平面に6段の階段を割り付けた魅力的な階段です。その彫塑的な形と3段目と4段目にかけて付けられている短い手摺りが念入りにデザインされているので、昇りながら足を止め、じっと見入ってしまいました。「建築はなによりも抽象的な思考の対象であり、その結果だ」という山本さんの論客ぶりはつとに有名ですが、この階段をひとつ見るだけでも、山本理顕という建築家が論客以前に「建築の上手い人」あるいは、ちょっと妙な表現になりますが「建築の歌心のある人」なんだと、あらためて思わないわけにはいきません。入口を入ったとたんに私はそのことにはっきり気づいたのです。さらに階段を昇りきって、デッキ手前で靴を脱ぎ中庭に立ったとき、今度は、思わず「うーン、こういうことだったのか！」と胸の内を眩しました。この空間が雑誌の写真で想像していた印象とは大違いで、中庭の広さも、その中庭を取り巻く建物の高さも想像していたよりずっと小振りに作られていて、大仰なそぶりも気張った感じもまったくないので、思わず我が意を得て膝を打ったのです。低く低く抑えられた建物たちは、建築というより小屋と呼びたいサイズで肩を寄せ合って親密感を醸し出していました。こうした小さな空間を巧みに寄せ集めて広場を囲む手法は、山本さんが集落の調査から経験的に学ばれたものかも知れません。その中庭にはおだやかな静寂が漂っていました。



台所のクックトップ越しに家族室を見る。完成当時はテーブルの部分が掘りごたつになっていた。道路に面した幅の狭いベランダは猫の通り道、すなわち、キャットウォーク



子供室と山本夫人の寝室のある様。壁際のアルミ棚は最近の改修の折に取り付けられたものとのこと。この家は刻々と変化し続けている



曲面ガラスの天窓から自然光の降り注ぐ明るい洗面、脱衣、洗濯スペース。奥にはトイレがある



中庭越しに家族様を見る。朝の早い時間だったので中庭に陽が差し込んでいなかったが、午後からはここは気持ちのいい日溜まりの居間になるはず

家族室のテーブルの前に座わりこむと、その居心地もちょっと特別でした。うまく言えませんが、室内にいなから意識の半分ぐらいは外にいる感じといったらいいでしょうか。テーブルを挟んでどちら側に座っても目の前はガラスで、中庭が見えるか、道路側に設けられた細長いベランダが見えるかなので、つついそちらに視線が誘われます。私はベランダ側を向いて座りましたが、山本さんの背後のベランダを猫たち(山本家には可愛い猫が3匹います)が、行ったり来たりしたかと思うと、いきなりゴロンと寝ころんでクネクネと床に背中をこすりついたりしているのが見えます。「この光景、どこかで見たことがあるなあ」とぼんやり考えていたら、子供のころ住んでいた家の茶の間の向かい側に縁側があり、そこを居場所にしていた飼った猫の仕草をこたつの中から飽かずに眺めていたことを思い出しました。以前この部屋は掘りごたつになっていたそうですから、そのころはいっそう座敷と縁側の感じが漂っていたにちがいません。

—
向かい合わせに座った山本さんは、芸大の大学院時代の話をしてくれました。あるとき山本さんの設計した住宅に対して、天野太郎教授が「台所でクックトップの上にナベを置いたら、左手でナベのフタ

を取り、右手でお玉を持つだろう、さあ君はそのフタをどこに置くんだ？」と質問したというのです。要するに「クックトップにはフタを置くぐらいのスペースは必要だよ」ということだったらしいのですが、山本さんはそんな所帯じみたことより、もっと住宅の本質に切実に関わることを見てもらいたいと反論したそうです。家族とは何か？ という問いかけから発し、いわゆる核家族のためのモダンリビングのあり方に疑問を感じはじめていた山本さんにとって、この天野教授による住宅設計の指導は、なんとも外的で歯がゆく、腹立たしくさえ思えたにちがありません。この興味深いエピソードを聞きながら、そんな若いころから山本さんはもう立派に「山本理顕」をしていたんだなあ、私はあらためて目の前にいる山本さんを見上げるような気持ちになっていました。ややあって、山本さんはポツリと「中村さんの住宅も実際に見てみたいな」と言われました。リップサービスだったかもしれませんが、山本さんからこう言われたら、やはり顔がほころびます。即座に私はこう応えました。「ぜひ、ぜひ、見に来て下さい！ ナベのフタの置き場だけの住宅ですけれど…」

なかむらよしふみ——建築家/1948年生まれ。

武蔵野美術大学建築学科卒業。1972-74年、宍道設計事務所。1976-80年、吉村順三設計事務所。1981年、レミングハウス設立。主な作品:三谷さんの家[1986]、REI HUT[2001]、伊丹十三記念館[2007]など。

主な著書:『住宅巡礼』[新潮社/2000]、『住宅読本』[新潮社/2004]、『意中の建築 上下』[新潮社/2005]、『Come on-a my house』[ラトルズ/2009]など。